

校内里山づくりを核とした学校臨床改善プログラムの構築（４）

「秘密基地づくり」「マコモプロジェクト」の取り組みを通して

竹村景生

（附属中学校）

池島徳大

（奈良教育大学大学院教育学研究科専門職学位課程）

谷口義昭

（附属中学校校長・奈良教育大学木材加工研究室）

今辻恵美子

（附属中学校）

The construction of program that is improved School-based Conflict by Development of school “ SATOYAMA ”（４）

Kageki TAKEMURA

（Junior High school attached to Nara University of Education）

Tokuhiro IKEJIMA

（School of professional Development in,Nara University of Education）

Yoshiaki TANIGUTI

（Wood Working Laboratory, Development of Technological Education, Nara University of Education）

Emiko Imatuji

（Junior High school attached to Nara University of Education）

要旨：学校現場では、いじめや不登校、友達関係がつかれないなど、自分の身体性と学校空間との間に齟齬を来すような様々な臨床課題が後を絶たないでいる。この間の奈良教育大学附属中学校の「学校の森」（以下「裏山」と呼ぶ）を舞台にしたクラブ活動（裏山クラブ）においても、上記課題を抱えた生徒たちが入部し、森の中での活動を介してお互いが人間関係づくりのスキルを積みあげ、自分の課題を克服して学校生活を送っている。これは、森（ここでは、人の手の入った2次林である里山）との関わりの中で自らの「いのち」を深めたからではないかと考える。ここでいう「いのち」とは、社会性（社会的公正や公共性、倫理観も含め） 共感性 感受性 霊性（歴史・文化的な叡智）など、子どもたちがかつておとなへの成長の過程で組み込んでいった「生活空間」（かつての共同体の知恵や教育システムの体系）を構成してきた要素の有機的連関として捉えている。

本研究は、裏山クラブを対象としている。前半は、「秘密基地づくり」の取り組みを、子どもたちが「隠れる」ことに注目して考察を行う。後半は、里山再生を地域の実践と結ぶ試みとして、前回に引き続き宮川流域ルネッサンス協議会の協力を得て、上流域の中山間地域で取り組まれている「マコモ田づくり」からの「水系からのアプローチ」の取り組みを紹介する。彼らの日常である「学校空間」から「生活空間」へと、秘密基地やマコモを通してどのようなアプローチを行い、「学校空間」を拡張し、自ら変容をとげていくのかを記述しようと試みた。

キーワード：里山 Satoyama、学校空間School space、生活空間Life space、E S D、水系Water system、秘密基地Secret base、隠れるIn hides oneself、マコモ Makomo

１．はじめに

学校現場では、友達関係がつかれないでその悩みを一人で抱え込む子どもたちや、自己中心性が著しく周

りとの協調性がとれない子どもたち、またはコミュニケーションストレスというか情報過剰の喧噪から自分を見つめる場を模索しようとしている子どもたちがいる。他方で、そのどれでもなく関わりの濃淡もなく

「それなりに楽しく過ごしている」子どもたちの日常が共存しているように思う。それは、互いに関心がないというよりは、見ないでおこうと自らに禁止を科しているかのようだ。「遠慮」なり「畏避」が先に働き、自分を集団の中で形成していくことがむづかしくなり、出口のない「孤独」と「無関心」を積み重ねているように思えてくる。

私たちの「学校の森（里山）」を舞台にしたクラブ活動「裏山クラブ」においても、上記のような今日的な課題を抱えた生徒たちが入部してくる。（全校生徒450人のうち50人強）彼らのクラブ活動での特徴として、里山という場を介してピアサポート関係が生まれ、クラブ内にゆるやかな共同性を形成し、クラブの運営に参画するとともに自らの課題を克服して学校生活を楽みつつ、自分と社会との関係を修復していく姿が経年の観察から確認される。これは、彼らが里山保全という景観との関わりの中で自らの「いのち」を、他者との対話や協同を通して深めたからではないかと考えられる。

2. 「隠れること」から「隠れ家づくり」へ

学校には運動場や体育館がある。そこには、昼休みにサッカーや野球、バレーボールを楽しんでいる子ども達の姿がある。それを私たちは「子どもらしい姿」と評価している。一方で、学校にはその様な表の舞台とは対照的な「隠れ」の遊び場、裏文化の場がある。振り返ってみると、私たちの子どもの頃に、学校でかくれんぼをして声を潜めて物陰を探し出しては隠れたように、または家の押入れややぐら炬燵の中に、倉庫の中に隠れたような経験はなかつただろうか。秘密の通学路をもっていなかつただろうか。今も子どもたちは、校舎の隙間の通路や、奥まった袋小路で（1人または複数で）キャッチボールをしたり、自分たちでルールを決めたゲームで遊んでいたりする。学年が棲み分けられた運動場とは違い、ここでは時に異年齢が出会う場でもある。本校には、裏山があるから昼休みに自分たちの基地のような居場所を作ってそこで秘密の話し合いをしていたりする。この基地、代々子どもたちのより集まる場所が裏山の何箇所かに固定されているから面白い。ブロックや倒木を敷いたすわり心地といい、樹木の囲み具合といい、学校の喧騒が聞こえない空間としても、子どもたちには最適の秘密の場所なのだろう。裏山は平城山の一角に位置し、2次林ではあるが、その秘密の場所は、集って彼らが話題とする内容とは対照的に、彼らが去った後には何ともなかったかのように沖縄の御嶽（うたき）のような静謐とした時間の流れだけが漂っている。通り過ぎていく風の声も聞ける。秘密基地に昇って寝そべれば鳥の声や遠方からの様々な日常の音が風景となって聞こえてく



【図1 樹木の伐り方講習からはじめる】



【図2 里山の間伐から資材調達】



【図3 伐った資材をみんなで運ぶ】



【図4 基地の床の骨組みを組む作業】



【図５ 丸太の受け渡し。気をつかいます。】



【図６ いよいよ２Ｆへ はしごもつくります】



【図７ 完成しました！みんなで記念撮影】

る。そこで、子どもたちは何を語り、誰の声を聴いているのだろうか。いや、そもそも子どもたちはどうしてこのような「隠れ」の文化を遊び、経験するのだろうか。

裏山は「隠れ」の場所であるとするれば、森は「隠れ」をその機能として包摂している。それは、生き物たちの擬態にも通じるものがある。「隠れ」ることは「隠す」ことによって自ら身を守ることである。と同時に

守られていることでもあり、守り育てたいいのちがある、成長のための場所である。

「子守り（子ども育て）」＝「籠もり（隠れ）」＝「こ（子）森」の場所であるといえる。これは、河川にたとえれば生まれ落ちたすぐの上流の森とその河口である干潟の機能に似ているとも言える。その大海への出口にも、大人社会の入り口にも「隠れる」場所は必要なだろう。また、子どもたちの「隠れ」は、時には「悪」を含んでいる。小さな名も知らぬ虫を殺したり、樹を傷つけたり・・・そのような他者の「いのち」とわたりあう秘め事がある。秘め事への誘惑と葛藤があり、嘘があり内省が生まれ、いつのまにか子どもたちは森から巣立っていく。悪も許されるとともに、その悪に気付き、いのちをよみがえらせるのも森である。

このような活動に対して奈良教育大の学生たちと話し合ったとき、「僕なら中学段階では、隠れたりしないだろうな。」「このような部活動は興味がある子はいないかもしれないけど、自分には必要ないクラブだっただろうな。」「何をするのかわからないようなクラブをクラブと言うんだろうか？」「クラブ活動には、ある目的なり目標があるからクラブ活動なんじゃないか？」等々の意見が寄せられた。確かに、「隠れる」行為は幼少期からせいぜい中学1年までのことであろう。しかし、今日中学生の高学年においても「隠れる」場所を求めているのはなぜだろうか。「隠れる」ことの反対は「晒される」ことである。子どもたちは何をもちて晒されているのかというならば、結果の評価をもちて晒されているのではないだろうか。ひとには「隠したい」秘め事がある。すべて正直に言いなさい・・・隠しごとはいけませんという文脈の中だけで人生が成立しているわけではないだろう。逃げることも、降りることも、隠れることも時には生きること、生き続けようとするいのちの方便である。

昨今の青少年の犯罪を考えると、おそらく彼らの生活半径内の「隠れ家」「秘密の場所」での犯罪が増えてきているのではないかという指摘がある。^(註1) 隠れ家においても、吐き出せない思いを隠しっぱなしにして、その切り離せない情念が、ただただ肥大していき、対話を求めず「わたし」の中に蓄積されていくのだろうか。そのときの隠れ家とは、隠れ家という名の「わたし」が拡張された空間でしかないだろう。そして、それがいつしかわたしのための「儀式」の場と化していくのかもしれない。

そのようなことを考えると、子どもたちの成長過程から「隠れる」場所も時間も失われてきているのではないかと想像される。

裏山クラブの機能は、特に活動としてのプログラムは用意していない。あえていえば、「好きなだけ隠れてきなさい」とするところにあるといえる。

ただし、そこにひとつだけ条件があって、「その隠

れ家を自分たちでつくってみたいか？」ということである。そこには、日常ではおそらく子どもたちが体験しないうちで「きっと、もっと楽しい何かが見つかるよ。」というメッセージを込めている。中学生の発達段階で十分可能な協同作業として、かつて子どもであったおとなの秘密基地体験（その身体性）を介して行っている。作業を介して、そこにはおとなと子どもたちとの関わりや対話、森との関わりや対話、道具との対話が生まれてくるのである。（図1～図7参照）

3. 「隠れ」の意味

ここでは、「隠れる」場がなぜ必要とされるのか、「秘密基地づくり」の位置づけなり、森に「隠れ」ることがどうして自身への気づき、他者への気づきに導かれるのだろうかを考察したい。

吉本隆明は、「言語には二種類ある。ひとつは他人になにかを伝えるための言語。もうひとつは、伝達ということは二の次で、自分にだけ通じればいい言語です。第一の言語は感覚器官と深く関わっています。感覚が受け入れた刺激が神経を通して脳に伝わり、了解されて最終的に言葉となる。つまり感覚系の言語といえるでしょう。一方、第二の言語は内臓の働きと関係が深い。……内臓には、感覚的には鋭敏ではないけれども、自分自身にだけよく通じるような神経は通っている。……『内臓の言葉』とでもいうのでしょうか、自分のためだけの言葉、他人に伝えることは二の次である言葉の使い方があるのだということです。」（p33）^(註2)と云うが、それは、隠れの場所で発する言葉に通じるものがある。一人であることの怖さを紛らすために発するひとり言、それは、小道や石、笹やきのこ、木々の樹紋や風の音に、昆虫や鳥に相對するときの言葉であったりする。「ひきこもって、何かを考えて、そこで得たものというのは、「価値」という概念にぴたりと当てはまります。価値というものは、そこでしか増殖しません。一方、コミュニケーション力というのは、感覚に寄りかかった能力です。感覚が鋭敏な人は、他人と感覚を調和させることがうまい。大勢の人の中に入っていく場合、それは確かに第一番手に必要な能力かもしれませんが、しかし、それは「意味」でしかない。「意味」が集まって物語が生まれるわけですから、そういう経験も確かに役立ちます。けれども、「この人が言っていることは奥が深いな」とか、「黙っているけれど存在感があるな」とか、そういう感じを与える人の中では、「意味」だけではなく「価値」の増殖が起こっているのです。それは、一人でじっと自分と対話したことから生まれているはずです。」（p36）^(註3)と語る吉本の言葉に「隠れる」ことの意味と価値が見出せそうな気がする。それをここで

は、「物語り直し」と呼んでみたい。秘密基地づくりは、おそらく子どもたちの「物語り直し」の場となっているのかもしれない。

そして、彼らが自身の生き通しを「物語り直せる」とき、その隠れると云うことの意味は、逆の「見つけてほしい」という存在のささやかな主張へと、いのちを輝かせ始めているのではないかと考える。

4. マコモプロジェクト

本研究が構想するところは、さらにこの里山での経験を「水系」というレベルにまで拡張して、今日の学校空間が喪失していると思われる日本的な共同性とは何かを、学校臨床事例と対比しつつ明らかにし、提案していくことにある。

そのことを、『教育実践総合センター研究紀要』第18号で次のように記した。

なぜ「水系」なのか。それは、「水系」には「生活空間」が水をめぐるシステムとして体系化され内包されるからである。その「水系」に育まれた歴史的景観や村落共同体という風土が培う教育システムが、時間の流れと共に形成されて今日までかろうじて残されているからである。

その「水系」が育む物語（水辺体験・祭・歳事儀礼・生業など）を、フィールドワークを通して読み解く作業は、流れる水を介して人と生命多様性との関わりに気付かせる。またそこからの知見は、人と人とのコミュニティの結合を「生活空間」に取り戻すために、学校空間に今何が必要なのかを私たちに教えてくれると考える。……（中略）……具体的には、学校空間と生活空間をむすぶ「水系」をテーマにしたカリキュラムづくりを構想する。水系内の風土性を構成する、例えば里山の入会地の知恵（コモンズ）や、遊び・祭・歳事儀礼、それに水系を構成する生き物たちの生命多様性といった「いのちの躍動」するかたちを、新たな学校空間を構成するカリキュラムづくりの題材として捉えていく。また、従来の環境教育は地域が抱える課題をその地域や上流域（流す側）からのアプローチによる問題解決型の学習が主であったが、水系のまなざしでは、上流域からと下流域からの相互交流（「対話」）から水系の「物語」を構想できるよさがある。将来、子どもたちが持続可能な地域づくりの「物語」へ参画していけるようなアクションプランとなることをねらいとしている。（p174）^(註4)

生活空間と結ぶ取り組みとして、私たちは昨年に引き続き「宮川流域ルネッサンス協議会」（三重県）とりわけ大内山町で流域案内人として中山間地域の活性化に取り組まれている小倉公守さんの協力を得ること

ができた。

取り組みの概要を記すと次の通りである。

出会い

裏山クラブと「マコモ」の出会いは、本年の3月に
行われた「宮川プロジェクト報告集会」でのマコモ細
工の展示からである。

そこで、マコモ栽培に関わっておられる方々との交
流が得られ、取り組まれている方々の「まこも」に寄
せる思いに共感しました。

マコモは稲科の植物です。三重県には菰野(こもの)
町という地名にもあるように、マコモはしめ縄などの
工芸品や日用雑貨の素材として古代より使われてきま
した。まだまだ世間の認知度の低い「まこも」ですが、
伝統工芸品としての「まこも」の技術伝承とともに、
その水質浄化能力や、中山間地の休耕田の活用による
農業の活性化、その商品開発の可能性に惹かれ、本年
度よりマコモ栽培に取り組むことになりました。



【図8 三重県大内山町の小倉さんのマコモ田を訪問
マコモの苗をいただく 4月】

マコモタケ

マコモタケは沼地等に生育するマコモの仲間で、茎の
部分がタケノコ状(太さ3~4センチ、長さ20~30セ
ンチほど)に肥大するイネ科の植物。原産地の中国で
は中華料理の食材として利用されていますが、日本で
はあまりなじみがありません。

このマコモタケ、もともとが沼・湿地の植物なので
田んぼ(転作田)での栽培が可能。ビタミン、ミネラ
ルを多く含み繊維質も多いことから健康食品としての
需要も見込まれています。



【図9 マコモタケの部分 食材です】

マコモ栽培に取り組む

小倉さんより私たちは8株ほどのマコモ苗を譲り受
けた。(図8)これらを持ち帰り、将来的なマコモピ
オトープづくりの第1歩目としよう、市販の「タフ
船」に1株ずつ植え、育てることにした。(図10)
育ててみてわかったことは、マコモは風に弱いこと
である。ちなみに、今年の10月の台風は小倉さんのマ
コモ田に大きな打撃を与えたのである。

小倉さんの普段の活動の柱は、清流宮川を取り戻すこ
とである。そのために、上流域の水質浄化を高齢化し
つつある中山間地域の休耕田の問題や地域おこしとリ
ンクさせて取り組まれている。私たちが訪れた大内山
も典型的な中山間地域である。周辺は放置された休耕
田だらけである。このときの苗に小倉さんの田んぼに
生息していたダゴガエルが混じっていて、教室にコロ
コロと涼やかな鳴き声を1学期間響かせてくれたこと
も付け加えておきたい。



【図10 学校ですくすくと育つマコモたち】

マコモ見学会

小さなタフ船ではマコモ栽培のスケールや意味がど
うしても伝わりにくいので、本年度の裏山クラブの合
宿を私たちは宮川上流の大紀町滝原でもった。総勢50
名の合宿である。

宮川のこと、源流部の生態、中山間地域での宮川流
域案内人の方たちの川を守り地域を育てる取り組みに
ついてのお話を伺うことができた。また、小倉さん
には大内山現地でマコモの講習会を開いていただいた。
(図11)

この講習会后私たちは熊野古道でツツラト峠を越
え、紀伊長島に向かった。ここでは、小倉さんと共に
水質浄化剤の開発として、長島漁協で出る廃棄物の魚
のアラとEM菌を使って「EMぼかし」をつくってお
られる方々と出会った。長島の景観を守る取り組み、
地域活性化のひとつづくりについて話を聞く。川を守
ること、海を守ること、暮らしを守ること・・・すべて
がつながっている。ひとつのつながりの可能性を子ども
たちは学んだ2日間であった。

10月には私たちは、大内山町にマコモ刈りに参加し
た。(図12)収穫したマコモタケの料理講習を受け、
おなかいっぱいになった。中山間地域の深刻な問題を



【図11 裏山合宿でのマコモ観察会の様子 講師は小倉さん 大内山 8月】



【図12 マコモ田での収穫 大内山 10月】

抱える三重県の、マコモへの思い入れを感じさせるものが伝わってきた。

マコモ普及の取り組み

私たち裏山クラブの活動は比較的自分自身への内省を促す取り組みであったが、今回はマコモを通して社会とのつながりを持つと計画した。

そのひとつとして、例年参加しているバーチャルトレードカンパニー2009への参加があった。

ここでは、部員たちによるマコモとの関わりやその取り組みの意義などをプレゼンテーションする機会を得ると共に、マコモ加工品の紹介にも勤めることができた。開発した商品はマコモ以外のものも多数あったが、ここでは2点紹介する。

マコモ茶・・・マコモについては、マコモタケだけではなくその葉効にも注目され、地域によっては葉や茎の部分がマコモ茶としても利用される。葉を天日で乾燥させて適当に刻んだらできあがり。ヤカンにひとつかみほど入れて10～20分気が済むまで煮出して飲む。浄化作用が高く、結石を溶かして小便にしたり、体の中の毒出しに最適だといわれている。

マコモ入浴剤・・・Ca・K・B6・Fe・Cu・等のミネラルを多く含み、体と心の活性化に良いと言われている。入浴剤としても抗菌効果があり、お肌つるつる、

体ぼかぼか、肌荒れに効果ある。

マコモ細工・・・真菰は神話時代からその実在が知られている。日本では今も神仏に供せられるケースがよく見かけられる。神事にしめ縄や座布団など、日用品にも汎用されている。今回、マコモ細工の伝承技術を受け継ぐことをプロジェクトの柱としていたが、講師の方が急遽事故で入院されたために講習会が取りやめになり、工芸品を出品できなくなった。来年度の継続課題としたい。

4. さいごに

私たちの内なる課題から社会の課題へ、どのようにつながっていくのか。環境問題、ここでは「マコモ」を通して、自分(たち)のいのちや暮らしの問題にアプローチしていく社会性へとたかめることは、将来の自分たちのライフスタイルの選択をどうするかという問題に突き当たる。

かつて「水」は、稲作を中心とした共同体の暮らしを支えていた。その村落共同体には、水をめぐる共通の意識をはじめ共同体の知恵の体系があった。子どもたちには、村のいのちの持続可能性という共有されるべき課題が祭りや儀礼を通して引き継がれていったと考えられる。

しかし、その共同体の知恵の宝庫とされる中山間地帯は、休耕田や高齢化によって疲弊しているのが現実である。そして、まさに学校現場で子どもたちの体験として、社会的な学びとして欠落しているものもそれである。今、それを地域に取り戻そうとしているおとなたちの協同のプログラムが、全国各地のそれぞれの地元で芽生えようとしている。この、おとなたちに出会うこと、おとなたちの協同に参画するつながりを持つことが、これからの学校現場に急務とされてくるだろう。

この4年間の裏山クラブの取り組みが、その活動を考える一助となれば幸いである。

註ならびに参考文献

- 註1 苅田知則 「子どもの『隠れる行為』」 九州大学心理学研究 2000年 第1巻 p106
- 註2 吉本隆明 「ひきこもれ」大和書房2002年 P33
- 註3 同上 p36
- 註4 「教育実践総合センター研究紀要」2009年第18巻 p174

参考文献

- 1. 中村重正 「菌食の民俗誌」 八坂書房 2000年
- 2. 中川香子 「かくれんぼう論」(下) 聖和大学論集 17号 1991年